

三河の文化を訪ねて

— 新城 —

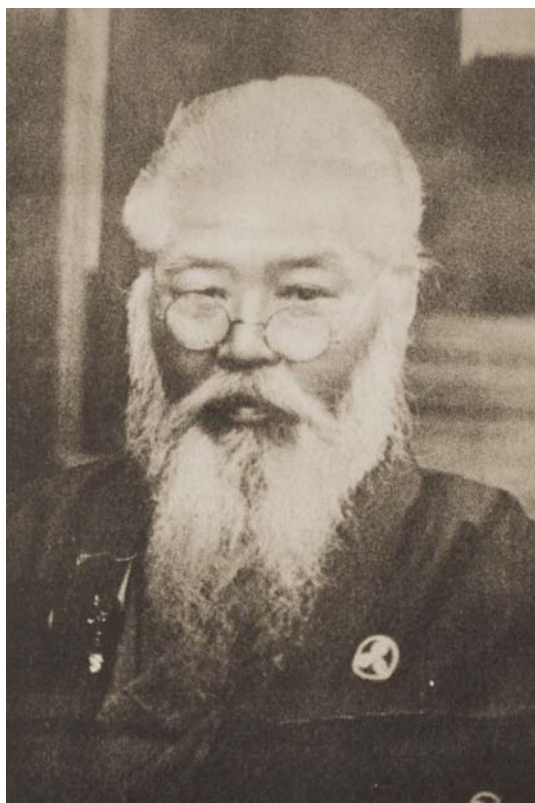
信玄台地の巨人

牧野文齋

新城市立東郷東小学校長

森

誠



初代 牧野文齋

文齋氏は、明治から昭和初期にかけて新城市の設楽原古戦場の台地で、

- ・東三河の名医として
- ・電気事業の経営者として
- ・古戦場の研究者として

幅広く活躍したこの地の巨人です。

牧野文齋とは、かつてこの地の信玄病院の院長である。現在病院跡地の一角に、文齋記念公園と呼ばれる小規模な公園があり、「信玄病院跡地」の碑が建てられている。

昭和八年七月発行の『東郷村報』第十一号は、氏の業績を次のように記している。「氏は永年校医として、又伝染病医として本村のため、御活動下さった。その業たる医術の傍ら、電気会社の創立・図書館の建設等により、地方郷党の産業文化等に貢献せられたことは実に大きい。又、史学を好まれて夙に長篠古戦場顕彰会を起し、史跡保存に力を致され或いは戦史研究に意をそそがれ、多くの文献を書き遺されたと聞く。(中略)」

公私の事業に尽力せられたことは枚挙

に違がない。」

また、柳田國男は『秋風帖』（昭和十五年創元社）で

「医者には昔から志の深い人がいる。長篠の牧野文齋氏のごときも、巨費を投じて熱心に郷士の書を購入ひ写させている。どの位学問に近くなつたか分からぬ。是以上は単に近づき得る人の有りや無しやだけが問題である」と述べている。

このように、その幅広い業績を各方面から高く評価される牧野文齋について、資料を手掛かりに紹介してみたい。

信玄の牧野家

注1

牧野家は、文齋の祖父龍庵（一八一〇—一八八六）が、一宮村江島（現豊川市）から信玄に移り住み、「陽春堂」の名前で町医者をはじめた。

文齋の父謙作（一八四〇—一九〇九）は、若い頃蘭方医杉田玄白の弟子に学び、その後慶応三年医師牧野家を相続した。謙作は陽春堂を「牧野医院」に改名し、明治二十四年に隠居した。

その子が、ここに述べる文齋（一八六



信玄病院跡地

八（一九三三）である。十九才で医術開業試験に合格し、東京で修行の後、父の隠居で牧野医院を引き継いだ。その後、牧野医院を「信玄病院」と改名し、新たな病院経営に全力を注いだ。病院の基盤が確立充実した四十才頃から病院経営の他に、多くの新事業を手掛け、この地域の発展に大きな役割を果たした。

昭和八年、文齋の死去により、その子幸民（一九〇五—一九七六）が文齋（二代目）を襲名し信玄病院長となった。以後、東郷東小学校等近隣学校の校医をはじめ、半世紀近く地域住民の健康管理に貢献した。昭和五十一年一月、文齋（幸民）の死去により信玄病院は閉院することになった。



平成10年代までの信玄病院本宅・長屋門



西病棟の廊下



診療・治療室（円内は医務局）

信玄病院の隆盛と町並み

明治四十一年、信玄病院を設立した文齋は、その手腕と実績からやがて「東三河の名医」の評判が高まっていた。当

時東三河地方屈指の病院としてその最盛期には、スタッフが二十名、三つの病棟には百人から二百人位の入院患者がいたようである。この頃、文齋院長の次弟熊太郎の妻が病院隣で薬局を経営し、現代の医薬分業の先駆けともなる形態を取り入れていた。

本格的な病院の極めて少なかった当時、信玄病院には毎日、外来と入院で大勢の人が訪れた。対応する病院の仕事は多岐多様で、働く人も多かった。その頃、電車の開通は大海までが明治三十三年、三河川合まで大正十二年で、病院に来るのも大変だった。関連して必要なものを整える手間も多く、来院のついでに買い物できたという要望に応じて、病院の近くにいろいろな店が立ち並ぶようになった。

大正二年に病院の東側に劇場「花菱座」を開設した。地域の人寄せや集会の場合と共に、来院する関係者への娯楽提供の場を意図していたものと思われる。

地域を拓く電気事業

注2

病院経営の傍ら、文齋は製糸場や信用組合の設立を進めたが、本格的には明治四十四年、新城町に資本金二万円で設立した新城ガス株式会社からである。新城町及び東郷村にガス供給を行った。このガス会社が始まって、電気会社の設立、水力発電所の買収、火力発電所の建設へと進んだ。当初、電気の供給区域は、一

町十か村の約千五百世帯であったが、十年後には一万一千世帯と順調に発展していった。また、配電・配線の電気工事に使用する碍子類生産も、合併した三河陶器で行った。

- 一九一一年（明治四十四年）
新城ガス会社設立
- 一九一八年（大正八年）
東三電気株式会社設立
- 一九二一年（大正十年）
三河陶器株式会社を買収・合併
- 一九二二年（大正十一年）
千郷火力発電所建設
- 一九二六年（昭和元年）
遠三電気と渋川電灯所を買収・合併
- 一九二八年（昭和三年）
三河水力電気と東三電気合併

牧野文齋が手掛けたガス・電気事業

こうした強力な電気事業の推進は、電気の時代を見据えた文齋の慧眼によるものであろうが、「もっと明い診察室を作りたい」という文齋の切実な願いが背景のように思われる。

私立図書館の設立

牧野図書館は、大正四年に大正天皇の即位を記念して信玄病院の一角に独力で開館された。図書館は、縦横各六間の二階建て洋風建築の書庫と、同規模の平屋建ての閲覧室があり、事務員二名を配置し、売店も備えたものであった。

図書館では、書籍を二千元（当時）で豊橋の榎本書店から購入し、さらに個人所有の古文書、一般からの寄贈や寄託のものを加え、二万冊を超える蔵書数を誇っていた。

ここには、県や郡役所などから閲覧に来る人があり、図書も無料で貸し出しが行われていた。また、有志による読書会という研究会の会場ともなり、地方文化の発展にも貢献した。しかし、諸般の事情で昭和十二年に閉館になった。文齋の死後、二代目文齋は図書の活用を考え、当時建設予定の町立図書館へ一万三千余冊を寄贈した。現在、新城市図書館に牧野文庫として収蔵されている。



信玄病院診療棟と牧野図書館